

学校適応はどのようにとらえられるのか（10）

—中学校への適応と友人関係の役割—

企画・指定討論：岡田有司（東北大学）
 企画・司会：半澤礼之（北海道教育大学）
 話題提供：水野君平（北海道大学）
 指定討論：齊藤誠一（神戸大学）

企画：大久保智生（香川大学）
 話題提供：中井大介（愛知教育大学）
 話題提供：林田美咲（愛知県スクールカウンセラー）

キーワード：学校適応，中学生，友人関係

企画趣旨

学校適応に関する研究は近年ますます活発になり、小学校・中学校・高校・大学と各学校段階における学校適応研究が蓄積されてきている。学校段階によって学校環境や児童・青年の発達の様相は異なるとはいえ、学校適応研究においても学校段階を意識することが重要だといえる。こうした問題意識から、企画者らは2017年度は小学校段階に焦点をあてて学校適応について検討を行った（大久保・半澤・岡田，2017）。本シンポジウムでは、中学校段階に注目し、主に友人関係の観点から学校適応にアプローチする。

先行研究では中学生の学校適応に影響を与える様々な要因について検討されてきたが、その中でも友人やクラスメイトとの関係は学校への適応に大きなインパクトがあることが示されてきた（岡田，2008；大久保，2005など）。

中学校段階は心理的離乳を背景に友人関係の重要度が増すとともに、同性で比較的少人数の親密な友人関係である、チャムグループを形成する時期であるとされる（保坂・岡村，1986）。そして、この時期の友人関係では、内面的な類似性が重視され、排他性や同調圧力が強くなるといった特徴のあることが指摘されている。このような友人関係を形成することは発達の重要な意味がある一方で、中学校段階において顕在化しやすい学校適応上の諸問題と密接に関連していると考えられる。

以上の問題意識から、本シンポジウムでは友人という観点を含めながら中学生の学校適応について研究をされてきた登壇者の話題提供をもとに、この問題について理解を深めてゆきたい。

中学生の「親密な友人関係」から捉える青年期の学校適応

中井大介

近年、青年期の友人関係に関する研究では青年が親密な関係を求めつつも表面的で希薄な関係をとることや状況に応じた切替を行うといった複雑な様相が指摘されている（藤井，2001；大谷，2007）。その中で、依然として「親友」と呼ばれるような「親密な友人関係」が青年期の学校適応や精神的健康に影響することも指摘されている（岡田，2008；Wentzel, Barry, & Caldwell, 2004）。

一方で、このように重要とされている青年期の親密な友人関係であるが、そもそも青年にとって、このような親密な友人関係がどのようなものであるかを検討した研究は少ない（池田・葉山・高坂・佐藤，2013；水野，2004）。その中でこのような青年期の親密な友人関係をとらえる枠組みの一つとして、近年、青年期の友人に対する「信頼感」の重要性が指摘されている。

しかし、この青年期の友人に対する「信頼感」については、質的研究は行われているものの量的研究が少ないため未だ抽象的な概念である。この点を踏まえれば青年期の親密な友人関係について主体としての青年自身が信頼できる友人との関係をどのように捉えているのかを量的研究によって検討する必要があると考えられる。

加えて上記のように中学生にとって親密な友人関係が学校適応や精神的健康に影響を及ぼすことを踏まえれば、友人に対する信頼感と学校適応の関連を詳細に検討する必要があると考えられる。しかし、これまで友人に対する信頼感が学校適応とどのような関連を示すかその詳細は検討されていない。そのため生徒の学年差や性差などによる相違についても検討する必要がある。

そこで本発表では中井（2016）の結果をもとに、第一に、「生徒の友人に対する信頼感尺度」の因子構造と学年別、性別の特徴を検討し、第二に、友人

に対する信頼感と学校適応との関連を学年別、性別に検討する。これにより中学生の学校適応にとって「親密な友人関係」がどのような意味を持つかについて今後の研究課題も含め検討したい。

スクールカーストと学校適応感の心理的メカニズムと学級間差

水野君平

思春期の友人関係では、「グループ」と呼ばれるような同性で、凝集性の高いインフォーマルな小集団が形成されるだけでなく（e.g., 石田・小島, 2009）、グループ間にはしばしば「スクールカースト」という階層関係が形成されることが指摘されている（鈴木, 2012）。スクールカーストは、生徒の学校適応やいじめに関係することが指摘されている（森口, 2007；鈴木, 2012）。中学生を対象にした水野・太田（2017）では学級内での自身の所属グループの地位が高いと質問紙で回答した生徒ほど、集団支配志向性という集団間の格差関係を肯定する価値観（Ho et al., 2012；杉浦他, 2015）を通して学校適応感に関連することを明らかにした。このように、スクールカーストに関する心理学的・実証的な知見は未だに少ないことが指摘されているが（高坂, 2017）、スクールカーストと学校適応の心理的プロセスが少しずつ示されてきている。

また、個人内の心理的プロセスだけでなく、学級レベルの視点を取り入れた研究も必要であると考えられる。なぜなら、学校適応とは「個人と環境のマッチング」（近藤, 1994；大久保・加藤, 2005）と言われるように、個人（児童や生徒）と環境（学級や学校）の相性や相互作用によって捉える議論も存在するからである。さらに、近年のマルチレベル分析を取り入れた研究から、学級レベルの要因が個人レベルの適応感を予測することや（利根川, 2016）、学級レベルの要因が学習方略に対する個人レベルの効果を調整すること（e.g., 大谷他, 2012）のように、日本においても学級の役割が実証的に示されてきているからである。

本発表では中学生のスクールカーストと学校適応の関連について、スクールカーストと学校適応の関連にはどのような心理的メカニズムが働いているのか、またどのような学級ではスクールカーストと学

校適応の関係が強まってしまう（反対に弱まってしまう）のかを質問紙調査に基づいた研究を紹介して議論をすすめたい。

友人・教師関係および親子関係と学校適応感

林田美咲

従来の学校適応感に関する多くの研究では、友人や教師との関係が良好であり、学業に積極的に取り組む生徒が最も学校に適応していると考えられてきた。しかし、学業が出来ていない生徒や教師との関係がうまくいっていない生徒が必ずしも不適応に陥っているとは限らない。そこで、今回は学校適応感を「学校環境の中でうまく生活しているという生徒の個人的かつ主観的な感覚（中井・庄司, 2008）」として捉え、検討していく。

友人関係や教師との関係が学校適応感に及ぼす影響については、これまでも検討されてきている（例えば、大久保, 2005；小林・仲田, 1997）。さらに、家族関係も学校適応感と関連することが示されており、学校適応について検討する際には家族関係やクラス内にとどまらない友人関係も考慮するという視点が必要であると指摘されている（石本, 2010）。人生の初期に形成される親子関係は、後の対人関係を形成する上での基盤となることが考えられる。そこで、親への愛着を家族関係の指標とし、友人関係、教師との関係と合わせて、学校適応感にどのような影響を及ぼすのかについて検討した（林田, 2018）。

その結果、愛着と学校内の対人関係はそれぞれに学校適応感に影響を及ぼすだけでなく、組み合わせの効果があることが示唆された。親子関係が不安定なまま育ってきた生徒であっても、友人関係や教師との関係に満足していることが補償的に働き、学校適応感が高められることや、友人関係や教師との関係に満足できていない場合、親への愛着の良好さに関わらず、高い学校適応感が得られにくいことが示唆された。つまり、学校適応感を高めるためには、友人関係や教師との関係が満足できるものであることが特に重要であると考えられる。

本発表では、親への愛着や友人関係、教師との関係といった中学生を取り巻くさまざまな対人関係が学校適応感にどのような影響を及ぼしているのかについて、研究結果を紹介しながら考えていきたい。